



日野病院の孝田雅彦病院長が、さまざまな病気や健康について、その予防法や健康に過ごすための豆知識などお役立ち情報をお届けします。

AIが医療をさらに 変える時代がやってくる

先月号の町報に令和時代の医療について書きました。その中でAIが画像診断をしてくれることを述べましたが、今回はもっと広範囲にAIが医療を変える可能性について述べてみたいと思います。

数年前から画像診断の分野ではAIの研究報告が多くなされています。肺がんや乳がんの診断、脳動脈瘤の検出では専門医に匹敵する能力が報告されています。胃カメラや大腸カメラにおいても観察している動画の中にかん病変を指摘し、見逃しがないようにしてく

れます。超ベテランの専門医がしても新人が行ってもカメラさえ胃の中に入れば同じように病気が見つかるようになります。

超音波検査においても、観察中に画面の中で病変を示してくれますので、患者自身が自分で検査ができるようになるかもしれません。また、撮影したCTやMRIをAIによって再構成することで何倍もの高画質にすることができそうです。レントゲンでは線量を落とすとしても良い画像が撮れることになり、被ばくの心配が減ります。

人口減少、高齢化が 進んだ地域の救世主にも

病理診断の分野での応用も期待されています。これまで病理医が何年もかけて積み重ねてきた経験を、AIはその何万倍ものデータを学習して診断することができます。全国的に病理医が減る中、病理医のいない病院や遠隔診療でAIの利用が待たれます。

AIの介護分野への利用も注目されています。超高齢化社会を迎えた日本では

介護は社会的な大問題です。この解決策として介護ロボットが開発されています。高齢者の移乗、入浴、排泄の世話をするなど介護者の負担を軽減し、見守りを代行したりすることができそうです。

次に高齢者の低下した身体機能を補助して自立支援を行い、患者にあつた最適なリハビリを計算し、行うことができます。最後に患者と会話を行って、精神的なサポートを行うロボットまで実用化されています。

10年後の医療は？生身の 医師なくしては語れない

このようにAIが進歩しても医師、専門医がいらない

くなるわけではありません。診断がついても、それをどのように治療に結びつけるか、患者さんへの説明や気持ちをくんで治療方針を決定するのは生身の医師しかできません。最終的な判断は医師しかできません。決してAIは責任をとってく

れませんし、患者さんの相談には乗ってくれません。あくまでも客観的事実を示すだけです。そこには個人個人の人生観が入る余地は今のところありません。人としての医師とAIがうまく融合すれば全く次元の違う発展が期待され、10年後の医療はAIなしでは成り立たないものになっているでしょう。

